

地域社会圏構想と都市美大学のあり方についての考察

Study of a University under Local Society Sphere concept

渡辺一生

WATANABE Kazuo

1. はじめに

名古屋造形大学は、2022年の移転を機に「都市美」大学⁶となる。新たな大学キャンパスの設計は現学長である山本理顕氏の提唱する「地域社会圏」という構想に基づいて行われ、大学の教育もまた、そうした思想に基づいて行われることとなる。

「地域社会圏」という概念については、山本理顕氏の著作「地域社会圏主義」¹に詳しい。しかし、特に今回の大学を通じた実践という点では、「地域社会圏」の概念は具体的でもあるだけに、その目的が見えにくい。

本稿では、10+1²というウェブサイトに掲載された、以下の2つの対談記事を通じて、地域社会圏という概念について理解を試みると共に、そうした概念を適用する大学の可能性について考察していく。

1. コモナリティ会議 06:「コモナリティ」と「地域社会圏」——「世界」を回復するために³
- 2.「集まって住む、を考えなおす」シンポジウム⁴

コミュニティという問題

今回の対談である『コモナリティ会議 06:「コモナリティ」と「地域社会圏」——「世界」を回復するために』は、どちらも建築家である山本理顕氏と塚本由晴氏によるものである。2014年に行われたこの対談は、塚本由晴氏の主催する建築設計事務所であるアトリエ・ワンによる著書「コモナリティーズ——ふるまいの生産」の出版を機に開催された。

「コモナリティーズ」という概念は、塚本由晴氏による造語で、「コミュニティ」という言葉に代替する意味合いを塚本由晴氏が必要としたことから生まれたものである。一方山本理顕氏は、著書「地域社会圏主義」を通じて、地域のコミュニティといった問題を中核においた論考を展開した。両者はともに「コミュニティ」に対する考察をしているという点で共通しており、しかしながら「コモナリティーズ」という造語が行われたことから、その考察内容には明確な差異があることがわかる。

こうした背景を受け今回とりあげる対談は、両者の共通点、あるいは視座の相違点を議論することで、知見を深める

目的で行われた。

対談の冒頭に、塚本氏は山本氏による《熊本県営保田窪第一団地》(1991)という事例を挙げている。これは、対談の中にもあるように、集合住宅に対して中庭を設け、なおかつその中庭に対しては集合住宅の住人のみが入ることが出来る、という集合住宅である(図1)。



【図1】《熊本県営保田窪第一団地》(撮影=相原功)

この考え方は、一見すると集合住宅という<個>を<公共>から断絶させるという形であるだけに、いかに<個>と<公共>をつなぐかという当時の問題意識に対して、相反する提案のように見える。塚本由晴氏もまた、

『当時の坂本先生の考えは、集合住宅であっても、住民しか使えないようなコモンスペースを持つのではなく、誰でもアクセスできるパブリックな領域をできるだけ拡大して、それぞれの住戸はこれに直接接続していたほうがよい、というものであったので、その真逆を行く《保田窪団地》には非常にびっくりしたのです。』

と言う言葉にもあるように、違和感を感じている。

この事例に続いて塚本氏は、坂元研究室設計による《コモンシティ星田》(1992)を事例としてあげる。ここでは、1つの街区を特徴的な外観の連続とすることにより、<個>である住民が帰属意識を持って町全体を意識することが出来るような<公共>のあり方が模索されている(『そうした条

件を共有する建物の反復によって、集落の街並がもつような共同性をつくりだすことがここで目論まれていたわけだ。』)。しかしながら、そうした特徴的な外観で形成された町並みは、熊本県営保田窪第一団地のような物理的な断絶ではないにしても、意識としての周囲からの断絶があるといった意見が研究室内で挙がる（『コモンスペース（住民など限定的な人々が共有するための空間：著者注）をつくらないと言うけれど、特徴的な建物が並ぶことで閉じた領域となるため、知らない人は入って来ないのではないか？』）。



〔図2〕坂本一成《コモンシティ星田》（『日経アーキテクチャ』No.434、日経BP）

これに対して、中心となる設計者である坂元一成氏はそうした状況を是とする。

『でも坂本さんは、それでもいいと。コモンスペースにある面積が確保されれば、コミュニティの活動が発生すると漠然と想定している平面計画はよくない、ということでした。』

山本理顕氏は、複数の世帯が共存する集合住宅の中に＜個＞の場であるコモンスペースを、＜公共＞のある外部から閉じた「中庭」としておいた。対して、坂元一成氏はコモンスペース自体は棄却しながらも、物理的にこそ閉じてこそいないものの、視覚的には部外者が入りにくいような状況、いわば「心理的なコモンスペース」が生じることを是としたのである。

また対談の後半部分において、塚本由晴氏の質問に答える形で、山本理顕氏は《熊本県営保田窪第一団地》に対する社会学者上野千鶴子氏による評価に言及している。

『中庭の使われ方について社会学者の上野千鶴子さんが調査

してくれました。子育て家族は上手く使ってくれていたのですが、単身者は絶対に出てこない場所になっていたということです。子どものスペースとしては上手いいったと思いますが、全体として成功したかはわかりません。』

結果として、《熊本県営保田窪第一団地》では、コモンスペースである中庭を通じた住人全員が参加する形でのコミュニティは発生しなかったことが分かる。しかしながらまた、山本理顕氏は当時の状況についてこうも語っている。

『たしかにあれば完璧なゲートド・コミュニティ（北米などで問題となった、防犯上の理由から完全に区画を壁で囲み、門で閉じた住宅群のこと：筆者注）です。もし同時に保育所や商店を組み込むことができたらいふ違ったと思います。当時のプロポーザルでは1階に高齢者施設や子ども施設を入れる提案をしていましたが、国土交通省の補助金に厚生労働省の予算は使えないということで、結局実現しませんでした。結果として住宅だけになったために、余計にあからさまに排他的になってしまった。住宅だけではコミュニティを権力として考えることはできないのです。』

この言及からは、《熊本県営保田窪第一団地》における計画は、本来計画された通りの形では実現されなかったことがわかる。つまり、外部から一見断絶され、何もないような私たちのコモンスペースには、本来はこの団地、さらには近隣の生活者（特に子供を持つ世帯）に密着した、社会的機能を内包するはずだったということである。

この点において、先の坂元一成研究室における議論、および《コモンシティ星田》における公共空間についての坂元一成氏の

「コモンスペースにある面積が確保されれば、コミュニティの活動が発生すると漠然と想定している平面計画はよくない」

という指摘は、《熊本県営保田窪第一団地》には当てはまらないということになる。《熊本県営保田窪第一団地》における中庭は、本来は「コモンスペース」という名の付く、「漠然とした場所」ではなかったからである。しかしながら、そうした事例はわが国においても現在も多く目にする。また、こうした傾向はわが国に留まらないことが、1993年に完成

したニューヨークの《ハイ・ライン》建設に関わった経験をもつアマンダ・バーデンによって指摘されている。アマンダ・バーデンはTED講演「公共空間が都市を活かす」⁵⁾の中で、私有地の中におかれた＜公共＞のための場の無効性を以下のように表現している（図3）。

『これはよくある風景です 広場は何十年もこのようにして設計されて来ました スタイリッシュな飾り気の少ないデザインは 現代建築によく見受けられるものです でも人々がこういう空間を避ける というのは自然なことです わびしい雰囲気だけでなく 危険な感じがするのです どこに座ればよいというのでしょうか ここで何をすれば？ でも建築家たちはこのスタイルを愛します このスタイルは建築家達の創造の基本です その様式は彫刻の一つや二つ 置けるかも知れませんがそれまでです』



【図3】 ニューヨーク市内の私有地内に設けられた公共スペース

山本理顕氏と塚本由晴氏の、「コミュニティ」に対する慎重な姿勢もまた、こうした現況に一因をおいているともいえるだろう。また、そうした状況は国を問わず、問題視されつつあることがわかる。

ここでいったん、両氏の「コミュニティ」と言う言葉に対する姿勢を通じて、両者の共通点を挙げる。

塚本由晴氏による「コミュニティ」への違和感

「コモナリティーズ」という概念については、塚本由晴氏による事例紹介を通じてその概念が説明されている。新潟十日町の特異な屋根形状が並ぶ町並みや、飛騨古川に残る、伝統的でありながら現代的合意によって保たれている町並みの

風景を挙げることで、住民達が住む場所に特有の風景が、住人に対して自らの地域に対する帰属意識を感じさせたり、地域に対する合意形成の起点ともなることを指摘する。

さらに、コペンハーゲンの橋において、石製の手すりが日光によって暖められる事を知る住民達がそこに集まる様子や、バルセロナで整備された公共の場を横目に、昔から残る鳥の飼育仲間のコミュニティが出来ていることなどを挙げ、そうしたコミュニティが決して新規に発生するわけではなく、毎日の習慣や、あるいは長い時間その地域に住んでいるからこそ分かる体験を共有するものとして見出されることを指摘しているのである。

こうした事例を挙げた上で、塚本由晴氏は「コミュニティ」という「集まり」を無目的に期待するのではなく、既に目的意識を持った住人達が使う場としてとらえ、そうした合意、あるいは意識を指して「コモナリティーズ」としている。さらに、建築設計においてもそうした既存の対象をターゲットにした場造りや、あるいはそうした意識を喚起するような景観を具体化することを目的としている。

山本理顕氏による「コミュニティ」の定義

これに対して山本理顕氏は、計画においてあくまでも具体的な場を用意することを前提としつつ、その場がどのように活用されるのかという点について、実践を通じて得た知見をもとに概念的な理解を提唱している。

その理解とは、結論から言えば「コミュニティ」という概念のいったんの棄却と、新たな概念としてのとらえ方からなる。対談の中で、山本理顕氏は従来のコミュニティがいずれも特定の権力を伴って成立していた事実を指摘する。ギリシア時代の住宅内部の構成がその家族のみならず、男性が社会と繋がるための空間を内包していた事実や、ネパールにおける同様の事例、さらにイタリアのサン・ジミニャーノの城壁都市において職人によるギルドが街区ごとに成立していた点などを挙げ、ギリシアやネパールにおける男権社会が＜個＞の領域である住宅において公共空間を伴う形をもたらし、あるいは特定の社会集団が町全体の造形に反映されることを示している。

この段階において、「コミュニティ」とは常にその由来が

明確で、いわば「コミュニティ」という言葉すら必要としない、いずれも特定の地域、特定の人々からなるいわゆる「寄り合い」に近いものであった事が示される。

こうした経緯に対して、産業革命以後には経済の急速な発展とともに、貨幣が基準となる価値の流通が「寄り合い」の外にまで及ぶことになる。そのことを、山本理顕氏は以下のように語っている。

「しかしそれが産業革命以降は「社会」という空間に変わっていく。社会＝ソサエティとは、ある目的をもって同盟を結んだ集団を意味します。非常に私的な集団でした。それが産業革命以降、シビル・ソサエティという言葉になり、一般化していったわけです。「社会」が市民にとっての一般的な空間であるかのように捉えられるようになっていきます。」

つまり、産業革命を契機として、「社会＝ソサエテ、イ：目的を持って同盟を結んだ集団」は消失したということである。それまでの「コミュニティ」がソサエティに根ざしていた以上、「コミュニティ」もいったん消失したということになる。

しかしながら、「社会＝ソサエティ：目的を持って同盟を結んだ集団」がなくなったとしても、人々はいなくなるならない。そればかりか、産業革命に端を発する社会の発展は人口増加をもたらし、都市や集合住宅といった集約的な人口のあり方を生み出していった。やがて都市化・密集化は、「共通する目的や同盟を結んではないが、たまたま隣り合わせて集団を構成している」人々を生みだした。

この段階において、「人々の集合」はあらゆる場所に出現し、そうした人々のあり方——つまり地理的に孤立していない、集合的な中でのあり方——こそが一般性を獲得する。が、それはかつてのように、能動的に集まった人々により構成される「コミュニティ」と言われたものとは本質的に異なる、単なる「集められた人々」であり、それこそが「シビル・ソサエティ」として新たに「社会」という意味合いを担うようになった。やがて、「シビル・ソサエティ」ここにおいて、「コミュニティ」という言葉の指す対象には、明らかに転換が起こった事を意味している。

山本理顕氏と塚本由晴氏の主張の共通点

これまで見てきたように、塚本由晴氏は「コミュニティ」を目指して整備された建築、あるいは都市計画に反して、地域独自に生じる「コミュニティ」のかたちを見出し、そのあり方をして「コモナリティーズ」と名付けた。

一方、山本理顕氏は歴史を辿ることで、現在の「コミュニティ」がかつてのあり方から換骨奪胎され、具象的な実体性を失った概念として成立した経緯を示した。このふたつに共通するのは、現代の「コミュニティ」とされるものに対しての疑念である。

すなわち、概念としては存在し、また建築計画の対象ともなっている現代の「コミュニティ」とは、設計対象としてはあくまで抽象的な概念の域に留まり、なおかつ匿名的であるという点において両氏の認識は共通しているといえる。

こうした認識に対して、塚本由晴氏は「コモナリティーズ」という概念を通じて、「コミュニティ」と言う「概念」に代わるその「現れ」に着目しているのに対し、山本理顕氏は特定の集団に対して特定の間、すなわち「かたち」をまず与えることにより、やはり「概念」に留まる現況の「コミュニティ」に対して、具象的なあり方と、社会との接点を期待している点が異なる。

「コミュニティ」の現れ方について

ここからは、ウェブサイト 10+1 において展開された、『「集まって住む、を考えなおす」シンポジウム』の議論をふまえて、「コミュニティ」に対していかなる「かたち」を与えるのかという点について考えていく。

対談では、山本理顕氏をゲストコメンテーターとして迎えた上で、プレゼンターとして建築家である平田晃久氏、長谷川豪氏、そして共に成瀬・猪熊設計事務所を営む成瀬友梨氏と猪熊純氏を迎え、住宅及び集合住宅を主なモチーフとしてその「かたち」のあり方が議論されている。

まず平田晃久氏のプレゼンテーションでは、氏の住宅と集合住宅が示される。プレゼンテーションで平田晃久氏は、主に建築物の「かたち」がどのような意図で生まれたのかにつ

いて言及している。

作品紹介では、隣接する空間同士の接続を完全に断絶しない住宅や、各戸にそれぞれ「屋根」というモチーフを与えた上での集合住宅、さらに各住戸を置く上で立体的に植栽と共有空間を挟み込んでいく集合住宅などが示される。こうした「かたち」を通じた試みの目的は以下の一文に集約されている。

「一戸の住宅をつくるなかにもすでに共有という概念が入ってきます。集合住宅ではそれがさらに明確になり、都市ともつながっていく。戸建でも、集合住宅でも根は同じところにあると考えています。

一方長谷川豪氏のプレゼンテーションでは、集合住宅作品として《練馬のアパートメント》が採りあげられ、テラスをモチーフとして様々な住戸タイプが混在する「かたち」が紹介される。ここでは現在主流となっている賃貸物件の選択条件に対する代替として、以下のようなあり方が提示される。

「この集合住宅は、不動産情報の間取り図から選ぶというよりは、どちらかという土地さがしをするような感覚に近いと思います。周囲の外部環境との接し方を含めて選べるというのが楽しいなど。

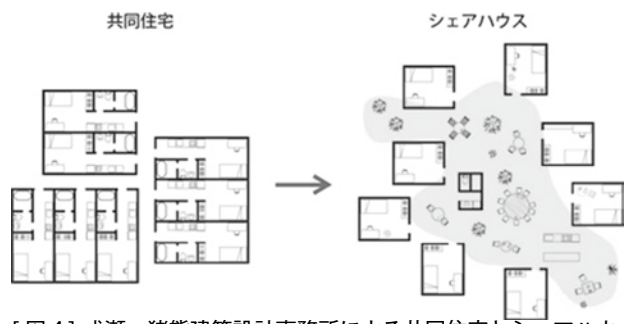
成瀬・猪熊設計事務所の猪熊純氏による最後のプレゼンテーションでは、それまでの平田晃久氏、長谷川豪氏が示した住宅と集合住宅というモチーフに対して、シェアハウスが紹介されている。

プレゼンテーションでは現在の住宅供給と需要における従来の関係の反転が説明された上で、従来のあり方に代わってシェアハウスというあり方が求められるようになっていくという主張が成される。

「家族などたくさんの纏まりが個人を取り巻いていますが、家族ではない側で住んでもいいのではないかな。出入りが自由で、拠り所となる纏まりが、さまざまな場所に存在するような、いま求められている住まい方だと思います。そして実際、シェアハウスは急激に増加しています。」

猪熊純氏のこの主張に見られるように、シェアハウスと

は、血縁関係などのない個人が主体的に集まって共同生活をする場である。これまでの集合住宅との違いは、これまでの集合住宅では1つの世帯ごとに用意された浴室やキッチンなどの機能が、シェアハウスにおいては共有される事が挙げられる。(図4)



【図4】成瀬・猪熊建築設計事務所による共同住宅とシェアハウスの比較

こうしたあり方は、ひとつには建築物を利用する上での経済効率性にその成因があることが猪熊純氏によって説明されている（「つまりシェアハウスでは面積が減り、住戸は増える。一戸当りの賃料は大体一緒なので、うまく設計すると1.5倍くらいは儲かる。しかし、ただ儲かるからいいでしょうというだけでは面白くないので、設計をしながらいろいろなことを考えています。」）。

また猪熊純氏は、そのような経緯から生まれてきた自身の作品について、「さまざまな性質の自分の居場所を、選び取りながら暮らす」ことが出来る点を利点として挙げている。さらに、このような「1住宅=1家族」(文中山本理顕氏による)ではないあり方が、現在の社会情勢により適応しうるものとする。

ここまでの議論をまとめる。

平田晃久氏は、住宅や集合住宅の作品を通じて、「かたち」を通じて常に生活者が空間を共有する仕組みを導入する中に、その「かたち」の見え方が都市に対しても一種の存在感を示すことで連続的に繋がっていくことを示した。

一方長谷川豪氏は「かたち」を通じて、集合住宅の中に様々な差異をおくことで、従来の不動産の価値観から脱却した価値を生み出すことが出来る事例として自作を用いている。

さらに、猪熊純氏は社会的要請から生じたシェアハウスというあり方の中で、従来の集合住宅と異なる「かたち」を模索する中で見出された可能性について述べている。

これら3つの主張では、いずれも建物の「かたち」が取り扱われている。しかしながら、その「かたち」は例えば「個性的な外観」などを獲得するためのものではなく、建物内の生活のあり方を反映している点に留意されたい。このことは続く議論の中で平田晃久氏による「あらわれ」という言葉に繋がっていく。

「あらわれ」とは何か

対談中、「あらわれ」と言う言葉はまず平田晃久氏によるプレゼンテーションで使用されている。ここでは「あらわれ」と言う言葉が、建築内部における生活者、あるいは建築を外から見る第三者と「かたち」との出会いのことを指して使われている。つまり、平田晃久氏は自らがデザインする形を、生活者や第三者かにとっての異物、少なくとも周囲に対して違和感を与える物として、ただだからこそそこに一定の存在感を与える物として用いているのである。

こうした意図は以下の引用文からも読み取ることが出来るが、この引用文からはまた、「あらわれ」と言う言葉はデザイナーが能動的に取捨選択した上での単なる「かたち」とは一線を画する意味合いを帯びていることもわかる。

「新建築」(2010年8月号)で長谷川さんと話したときに、僕が外形と言ったので、長谷川さんには形の問題だと思われていたようなので、いまは「あらわれ」と言うことにしました。形の問題を超えたある纏まりとしての「あらわれ」を考えるべきです。

「僕はさまざまな階層がその「あらわれ」を持っているという状態をつくりたい。個としての建物の「あらわれ」が都市と接続することにおいて重要になってくると思います。

この「あらわれ」と言う言葉は、後に続く議論で山本理顕氏によって「アピランス（「見え方」の意を表していると考えられる：渡辺注）」とされたうえで、「シンボリズム」と言い換えられている。

「平田さんが言われたアピランスの問題。僕はそれをシンボリズムと言い換えることができますと思います。この40人が集まる建物は、都市のなかでどのようなシンボリックな見え方をするのか。そこでシンボリックに集まろうとする理由は何か。単に表層的なシンボルなら、屋根瓦を上のにせたりマンションの玄関を飾ったりするわけですね。」

山本理顕氏はまた、これに続いて、猪熊純氏のシェアハウスに言及する形で以下のように論を展開する。

「自律した個人はどう一緒に住めるか。また高齢者や赤ちゃんやシングルマザーやよれよれじいちゃんがシェアハウスで一緒に住もうとしたらどういうやり方があるか。オペレーションがさらに難しくなるけれど、僕はそれが重要だと思う。そのときに「これが俺たちの家だ」と思えるようなシンボリズムが必要になる。いままで家族の住宅が担ってきたことをこれからは何らかの共同体が担っていくんだと思います。

僕はそれをM集団と呼んでいます。S集団というのは1人でも2人でも3人でも良い。家族でも良いし高齢者1人でも良い。M集団はその纏まりです。先ほどから話に出ている中間集団は、M集団と言い換えても良いでしょう。日本にはこのM集団が無いことが前提でシステムができています。家族(S)と国家(L)しかないわけです。それではM集団はどんな纏まりになれば良いのか、またどのような建築の形態を持てば都市と関われるのか。S集団の家族だけが集まったマンションは外に開く契機がない。それぞれの住戸が密室のようにつくられているからです。」

この段階において、山本理顕氏は平田晃久氏の考える「あらわれ」が結果的に産み出す効果をいかに扱いうるかという議論についての方向性を指し示す。その方向性とは、従来の「家族」などの単位である「S集団」と、「国家」、あるいは「家族」を最大限に集約した単位としての「L集団」との間にあるべき、「M集団」の「あらわれ」を指向したものである。

この点については、今回の議論のモデレーターである門脇耕三氏が以下のようにまとめている。

「集団の性格を考えないと、全体を表象する意味が無いという指摘が重要だったと思います。つまりシンボリズムが出

てくるためには、その集団のキャラクターを考える必要があって、シンボルをつくること自体が直接の動機になるというよりは、むしろ集団が社会のなかでどう位置づけられ、何を求めて集まっている人たちかを考えることを通じて、結果としてシンボリズムが必要とされる、というお話だったと思います。」

平田晃久氏による「あらわれ」ということばに対する、山本理顕氏による「シンボリズム」ということばへの言い換えは、両氏の間で興味深い齟齬を生じている。

平田晃久氏は自作、特に《イエノイエ》(2008)の紹介において、その「あらわれ」として屋根形状をあげ、自然環境の中において屋根の形状が雨水の流れの一部に位置づけられつつも、その下に内包するM集団をも象徴している点を挙げている。

だが、屋根を介したこれら2つの意味合いの重ね合わせにおいては、あくまでも前者、すなわち自然環境における応答としての形状が、第一義的にあることが平田晃久氏の意図であることが以下の引用からわかる。

「人間が屋根をつくっているのではなく、水の流れが屋根をつくっていると考えれば、建築が違う広がりを持ちうる。シンボリズムに回収されないようなアピランスを考えていきたいのです。」

山本理顕氏の「シンボリズム」という発言については、長谷川豪氏もまた以下のように疑義を唱えている。

「山本さんは、それでも建築家はシンボリックにつくらなくてはいけないとおっしゃいましたが、本当にそうでしょうか。シンボルは常に求められているのでしょうか。」

これに対して、山本理顕氏は以下のように応答している。

「建築はある表象、シンボルを担わざるをえない。例えば公共建築は地域社会のなかである種のシンボルにならざるをえない。そのときに高層やぎらぎら変な格好の建築をつくればいいわけではない。地域社会型のシンボルをどのようにつくるのかは毎回問われていることだと思います。」

山本理顕氏のいう「シンボリズム」とは、デザインする対象が「シンボル」となることを意図してデザインするということではない。そうではなく、何らかの意図をもとにデザインをすれば、その対象は結果的にその意図を象徴するような性格を帯びてしまうということを指している。

またその意図とは、必ずしもデザイナーが個人として設定するものにとどまらず、特に今回の議論事例で言えば、住宅や集合住宅、さらにはシェアハウスにおいて形成される、山本理顕氏の言う「M 集団」に対する「かたち」の「あらわれ」だと言えよう。

シンポジウムの終盤で、門脇耕三氏は以下のようにまとめている。

「個と社会の中間集団をつくるような住まい方を考えなくてはならない。その空間的な枠組みを与える方法を平田さんも長谷川さんも成瀬・猪熊さんもそれぞれのやり方で模索している。一見まったく違った皆さんのアプローチが、そうした問題意識において共通している。」

このまとめからは、このシンポジウムにおける意義が読み取れる。それとは、異なる3人の建築家による観点が、「中間集団」という点で共通していることである。

しかしながら、三者に共通していた問題意識はもうひとつある。それとは、三者の作品に共通して見られた「特定のかたち」がいかに受け取られるべきかという意識である。

この問題意識に対して、山本理顕氏は「シンボリズム」という言葉を用いて応答した。その意図の一端は、旧来の経済原則主導型による現況の町建物の画一性に対する批判にも基づいている。

だが、山本理顕氏のこの応答において最も意義が認められるのは、「シンボリズム」はデザイナーによって与えられる外的なものではなく、デザイナーがデザインの対象とする地域や、そこに連続する都市、あるいは人々の集団に内在するものとした点にある。

山本理顕氏が《熊本県営保田窪第一団地》において、中庭を住人の独占する領域とした理由もそこにある。そこは、外

部と単純に連続した中間領域なのではなく、団地に住む「S 集団」が、周囲に立ち並ぶ「L 集団」としての団地群に対して「M 集団」を形成する上での枠組みであった。この事例では、「1 階に高齢者施設や子ども施設を入れる提案をして」おり、仮にこれが実現されたとなると、閉鎖された中ではあってもそこには外部の人々も巻き込んだ一種の「地域」が形成されたはずであり、そうした「地域」は、周囲の団地に対しても特異的な「シンボリズム」を獲得したと考えられる。

同様の意図は、山本理顕氏が全体計画をとりまとめた《東雲キャナルコート CODAN》(2005) において、手法を変えて実現されている。ここでは、6 つの集合住宅がそれぞれ異なる建築家とディヴェロッパーの設計により実現され、それらが敷地中央を蛇行する街路をはさむ形で配置されている。

また、山本理顕氏設計による住棟では、生活空間を断面図のように映し出すファサード計画がなされており、それぞれの住民の生活風景画そのまま、建物のファサードとしてシンボル化されるという手法がとられた。さらに、住棟を取り巻く形で地上から一層持ち上げられた人工地盤が庭を形成し、地上の公共的な空間とは異なる、住人主体の空間がおかれている。

都市美大学にとっての「シンボリズム」

ここからは考察として、都市美大学をとりあげ、地域社会圏の中で大学がいかにあり得るかを考えていく。

先の議論において、「シンボリズム」はデザイナーによって与えられる外在的な物ではなく、地域、あるいは人々に内在するものであることを説明した。

また、地域社会圏という概念においては、個人という最小単位でも、国家という最大単位でもない、中間領域的な単位、山本理顕氏の言葉で言えば「M 領域」がその主体となることも説明した。

都市美大学もまた、この「M 領域」のひとつである。だからこそ、より大きな単位、それは国家というよりも大学周辺の地域や、さらには名古屋市、愛知県などと言った段階の「L 領域」に対して、視覚的にも、また様々な関係においても継続的な関係が構築されるべきである。

具体的には、学生の作品展や、公開講義などを通じて地域に対して開かれた大学のあり方を模索し、さらには 2020 年 1 月 21 日に本学において開催された、良品計画の金井政明会長と山本理顕学長との対談において学長からの示唆があった、小規模な商業活動なども含まれてくるだろう。

しかしながら、より具象的な領域、学生の教育においても、シンボリズムたる表現、あるいは思想を備えた学生を育てていくことが望まれる。

本学の位置する愛知県下の高校教育においては、美術教育は他都道府県に比べても貧しい状況にあり、大学に入学してくる学生の中にも美術的素養を備えていない——具体的には高校での美術教育を受けてきていない——学生が多数存在する。

また一方、美術領域のみならずデザイン領域も含めて、現在は価値観の転換が激しく起こっており、従来のような「教わる」美術、「教わる」デザインではなく、「問題提起する」美術であったり、「提案する」デザインが求められるようになってきた。

そんな中では、学生が必要とするのは明確な自己であり、その主張をするうえでの自信である。旧来の価値観をふまえるのみならず、学生が新たな価値観を提示、形成していく上での支援をしていく場こそが大学となるべきであろう。

まずは学生に対して自分の専門領域への関心を育てると共に、学生が制作を通じて何をやりたいのかを問い続け、場合によっては本人さえも気がつかないその作品の良さについて理解をさせていく必要がある。

そうしたやりとりを繰り返すことにより、全ての学生がてらいなく自分の意図を他者に伝え、世に問うことができるようになることが、都市美大学の使命なのではないだろうか。

また、そうした成果が集合的に外部に提示され、あるいは成果を通じて外部との関係に一定の位置を占めたときこそ、都市美大学は独自の「シンボリズム」を獲得するのである。

注

¹ 山本理顕「地域社会圏主義」2013、LIXIL 出版

² 10+1website <http://10plus1.jp/> 2020 年 3 月 3 日 最終アクセス

³ 10+1website コモナリティ会議 06:「コモナリティ」と「地域社会圏」——「世界」を回復するために <http://10plus1.jp/monthly/2014/09/06.php> 2020 年 3 月 3 日 最終アクセス

⁴ 10+1website「集まって住む、を考えなおす」シンポジウム <http://10plus1.jp/monthly/2011/01/atsumatte.php> 2020 年 3 月 9 日 最終アクセス

⁵ TED「公共空間が都市を活かす」https://www.ted.com/talks/amanda_burden_how_public_spaces_make_cities_work/transcript?language=ja

⁶ 「都市美」とは歴史的には 1899 年から 10 年程度の間、アメリカ合衆国において展開された運動であり、1893 年のシカゴ万博における未来的な都市造形を起爆剤として、当時の急速な都市化に伴う産業主体の都市作りに対する審美的な要請としての意味合いがあった（長谷川洋、玉置伸悟（1991）『都市美運動の起源と意義』福井大学）。この運動によって、リンカーン記念館やグランド・セントラル駅などの、現代においても映画のモチーフとして多用されるような優れた建築事例が数多く生まれた。しかしながら、わずか 10 年でこの運動は収束する。

一方、わが国においては、大正期から、わが国固有の形として「都市美」が提唱され、戦後の復興まで含めて幾度も主体となる団体や思想を変えつつ提唱され続けてきた。

アメリカ、日本のどちらの史実においても明確なのは、「都市美」という考え方自体は、都市が成立して以来、時代を超えて支持され続けながらも、実践に至る上ではどれ 1 つとして継続を為し得なかった点である。

こうした歴史について、特にわが国における通史として『都市美運動シヴィックアートの都市計画史』に著した中島直人は、結びにおいて、『各地の自治体の積極的な取り組みや NPO をはじめとする各種の市民組織の活動によって、都市の自治と市民社会の存在が実感されるようになってきているのも確かである。現代の都市美運動を突き動かすのは、こうした実感に他ならない。』としている。（中島直人（2009）『都市美運動シヴィックアートの都市計画史』）。

筆者が「都市美」大学として新たな名古屋造形をとらえるのはこうした思想に共鳴するからである。都市美運動が仮に、美しい建築物や都市のみを目指すものであるとすれば、それは必ず失敗する。それは、時代ごとに生じては消えてきた従来の「都市美」の歴史が証明していることである。このような構図はまた、美術教育の場においても指摘できるといえよう。美術、芸術を、これまでのように専門領域に留まるべきものとして捉える限り、その裾野はあくまで狭いままである。そうではなく、市民や自治のなかに、半ば自発的なものとしても、美術・芸術を位置付けていくと言った試みは、今後の美術教育において不可欠な要素となっていくと筆者は考えている。

名古屋造形大学における「やさしい美術プロジェクト」や、明治村におけるプロジェクションマッピングなどの運営は、そうした試みの先駆と言えるだろう。他の美術大学においても、専攻領域と市民や社会との接点を模索する試みは今や一般的なプログラムとなりつつある。

本論において掲げる地域社会圏とは、都市における市民の自治の場に他ならない。そうした場を形成する中で、特に美術やデザインのあり方を模索していく大学像として新たな名古屋造形大学を希求する中、著者はあえて「都市美」大学という造語の表現を行ったものである。